教育
159
下

安藤二郎補校

女四書

女戒

全

20649
教科書文庫
2
110
30-1821
20003
02522

157
T

教育学科

安藤一郎校補

女典書

東京　瓶岳書房梓

全七冊

廣島大学
教
48628
図書

叙

治國之本在家齊家之本在婦之一象之宰相也是故婦賢則家齊婦不賢則家亂自古國家之治亂不本於婦人乎蓋鮮矣婦

之賢不賢所關係不大乎
方今婦女從恣淫蕩新
紙所載不絕其跡今而不
救之將示其所底上者頃日
受人安藤貞據女四書來
示予曰此乃往年所刪正今

因書肆之請將公於世請子
序之予駕才素非其人然
嘗此書之出也世之父兄日少
講之以訓女子靜淑之德習
以為性賢婦可以育婦道
可以立也故并一言為夫書

中所說合于今日之時勢與
否則非予所敢知
明治辛巳秋日於京城台南
寓居白里內田素一序并書

女四書序

古稱女有四德曰言曰
德曰功曰容言要辭
令溫和德要靜
貞柔順功要絲麻

精巧宛轉婉娩窈窕書之誡牝鷄詩之稱雎鳩易之說牝馬皆要其守靜貞柔曾閔以悍然與男子相抗者爲敎也而世方主洋說往往唱男女同權之說甚矣女敎之衰也南總安孫君蓋有慨乎此

乃取女誡女論語女孝經內訓國字譯之名曰女四書雖女兒今易解以繡梓布世而助女教嗚乎世之女子苟讀此四書則知其悍然與男子相抗而稱同權之非善哉君之譯此書也向余奉敕部

省命爲女教院訓
尊即欲以前所陳
者興女教之衰以時好
之如彼恐余之說或
不行乃遂辭職今
君之譯此書實爲
擴我心余不敏雖
抑乎女辭烏得
不樂爲序之
明治十四年辛巳

楓岳書屋藏

秋八月十九日於之畫
樓中
花蹊跡見隨撰并書

禮嘉 圖書
等閑

校訂女四書小引

一此書の原本は漢唐明代の聖后賢婦と呼ばるゝ人々が著せる婦女修身齊家の規鑑なる明の相晉外といふる人集め合せて女四書と名付らるゝあり本邦和解して古く世に稱せられたりしを此と見るれど原書は四書ふは女範なりて孝經なく和解みい孝經なりて女範あ一ゆつきかいみ一ゆき書のきゆとめふ用のさくいなきど和解みを原書は本文の外み因とる謂いまゆ一きものなりて孝女節婦

女四書 小引 一 成安書堂藏

乃言行を掲字間々女範中の事をも引きそゑ
ゆゑ原書に照らして校訂増補し併て女範中尚漏
れたるを拔き和らげ挿圖をも其不足を補ひ
學齡女兒をして偏に會得し易からしむ
一此書は明曆年間より行はれ板木數種ありきと
聞りおれど姓氏を載せざれば何人の手に成
りしかの移係を知るに至らず今古書目錄
を閲るに元氏女四書なるものなれど
果して此書なりや定かならぬいつまで
れ神妙の筆にて能く原本の意を寫し余輩淺
劣の啄を容さべきものにならぬ但時世のや
んごとなき開学ゆく今の御世にいたれば適
いげる教なきにしかならばれども寸蝕をも
て丈木を捨るに忍びぬ聊か訂補しを再び世
に出し如世間有識の士其老婆心を憫み美玉
蠅屎あらざれい人に依て功をあらしものあり
と誘り給ふと形うれ
和解の四書は和るを旨とせしものとして多
く假名字を用ひ行れば讀み易きをれども

き又事の解し難きも亦り今其解易くしを讀
ミ難うらぞ併せく文字を知らしめんがため
原書を斟酌して本字ふ假名を施しなれとも
のき素より假字格を知らちきば誤謬いと多
かるべし識者幸ふ訂し給へ

一原書の聖后賢婦の四人の手ふ出しまら前ふ
述ばる如ふそいづきも名高き人々あれども
其素性を知らちきば其信用も自然厚うらざ
るものあり故ふ一書ごとふ著者ぬ肖像と狀況
を寫し次ふ其略傳を附しぬ見ん人只ふ悅眼
の具とせるを勿れ

明治十四年八月　　瓶岳安藤一郎誌

女誡

王修智書于
時年九歲

曹大家ハ後漢乃人ふして姓ハ班名ハ昭と云ひ曹世叔の妻班彪の女班固の妹あり夫世叔早く世を去りり合ふ昭固く志を守り子女を教育しなるふ長子曹穀才學ふ秀で成人の後官ふ仕へ爵禄共ふ尊く金紫とて人臣みんらよ於き譽きの章を賜りたり又長兄班固前漢書を作り半途ふして死せりしば帝の詔を得兄の志を繼き全く大業を畢まり又次兄班超鎮西城とく遠き地ふ在官たりしかハ昭其遠方ふ在るを悲み書を朝廷ふ奉り遂ふ召還さるしことを得せしめ

是等乃類いづれもあらぬ事多かりけれい帝の御母后鄧太后其志節殊勝あらと嘉しめられ宮中ゑ召入れ玉ひ大家の號を賜もり常ゑ曹大家と呼せられ皇后諸貴人及ひ多くの女官達の師とあるいづれも孝子の禮をのゝ事いくめりとぞ女誡七章い卽ち此曹大家の著を所ゑり

飛岳書屋藏

女誡目錄

○卑弱章第一
○夫婦章第二
○敬愼章第三
○婦行章第四
○專心章第五　附　唐價妻の事
○曲從章第六
○和叔妹章第七　附　王覽兄弟の事

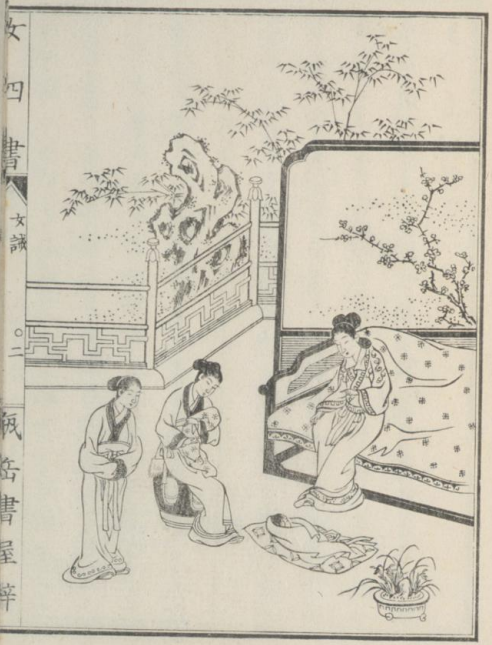
女誡目錄終

楓谷書屋藏

女誡

卑弱章第一

卑弱と云ふも我が身を謙り卑くして心容ち物和らぎ形を以ていふなり。ひきも古の教へに女子を生めば三つの禮法あり。一つは生まれて後三日床の下に臥さしめ二つは弧矢を設しめ三つは齋〳〵先祖の廟に參り〳〵女子を産む事侍るを告げ奉るなり。其三日床の下に臥ちしめる心は女は地の道を稟て生れ侍るをの形きは我が身を卑く謙りて夫を敬慎しみ萬



の事ふつゝしゝて後夫に先たつ我身を後とみ〻我
形貌家事ふときをなりとを義矜る心形く又惡
しき事ありを人ふいはをを爭ひ云ふ事形く
人ふおとしめらるゝとをを〻わが身に潔くして
堪へ忍び常ふ物を恐き慎しむ心を教へ知しめ
んなめ形り其つむに成弄でしむ心い女い績ミ紡
き縫針の事を務むべき物形きわそのこわば成
習ひ明暮怠らず勉め勵ませ苦勞を知らしめん
爲也齋しく先祖乃廟ふ詣ぐつゝ奉る心わ先祖
の祭い夫婦とりふ執行ふをの形きら身を潔し

操を守りて、かたくむまのみぎりがゝしき振舞ひく、誠を盡し先祖を祭らしめんと成教ふるかゝり、此三つの事何れも女子の常ふ行ふべき道ふ〳〵、禮法の定まる教へかきを生き出ると其まゝ、此三つの作法成ひ、教へ示さるのゝ幼時より此教を心ふかく身成脩め待らば、夫ふ歸ぎ待ると恥ろしく怨退くまゝ憂ひかゝ〳〵、行末さかえ行べし、もし此教へふたゞひ待らば、夫ふ法ろふ道立ぬ〳〵、遂ふ禍ひ成招く原ときとふまゝ、

夫婦章第二

夫婦の道ハ陰陽ふ擬らへ、神明ふ通ひく、天地の道理ふなぞらへ、人倫相續の基ふかきべ、聖人の教も夫婦乃道成はきと〳〵給ひく、至く重き道也、夫魯ろかきを妻成むきめ得ぬ妻賢らめらねを、夫ふ事ふる道成まらば、夫と〳〵く妻を治め得ぎきば、威儀ぬこき妻と〳〵て夫ふ事ふる道を知らききば、義理欽ぬ、今乃世ぬ人の親なる者、男子ふい師をとり、學文をさせ、行跡成正〳〵くもふるおとを教ふといへども、女子ふも此を〳〵へ絶えく

しはきば大うさい夫ふ事まち系禮義を志らば
しそ、はきはしき行ひのこ多くしこ耻ちしめ戒
めふむり身乃禍ひ起る事其ためしをくの昔ちら
をはきば男子女子ともふ教ふる道かいるべあ
らに況しく女ち必を他人の家ふゆくとの時き
ば母乃教肝要ふしく常々心だをゆきしきを本
とし五六才の項より物ち名數目方左右東西の
方角等を初めとしたひく物言ふこ起居動作織
縫ふこば戎教ふべしなくこ世の常ち夫婦の道
全ちらば系い女子ふまれらち教ゆきふまなし

敬順章第三

夫き陰と陽とを、各其性を異にし生ぜるが如く、男女の行ひも亦同じからぬものあり、陽は剛く、陰は柔なるは自然の理なり、男は強き戎貴ひ、女は弱きを美とす、故に古き鄙諺にも、男戎生まれば狼の如くなれど、女を生まば鼠の如くなれ、男は其弱き戎恐れ、女は其虎狼の如く強きを恐るといへり、これも女の平生身を修むる心懸にも、敬をと貴きはなく、夫に事ふる道は、順ほどよきはなし、其敬とは、常々誠の心を抱く、片時も間も怠る心なき事なく、順とは物柔なる心を持て、夫の猛く強き心に曲ひ従ふ事なり、此二つの道は、女の大なる禮義なれば、此徳備はりたる女は、一度嫁しては、夫の意に適ひ、必ず夫婦の中和らぎ協ひ、行末久しく、末遂侍らんと云ふべきと夫婦の好身は、一生の間にも、少時も間を離るゝことなく、常に一室の内に棲み、内外善悪とも、に語合ひ知るものなれば、後々も夫に馴れ過ぎ、心やすく、なふ心出来ないふ、淫らき詞やも云ひ、我まゝなる挙動なりといふと、なく夫を侮ることなく有るべき也、是

き偏つふ慎こゝろ有き故ふ斯く浅間敷行ひ有く夫ふ見限らき身をも失ひ侍ろ有う惣て女夫婦いふさ有を事ふつ弟く善惡をいひ爭ひく夫乃怒り残起きしむいろらぶ爭ふ心い謙り從ふ心有きより起りく必や夫婦乃中ゝ疎く有ふらぬより夫婦い禮義を以く親しく恩愛を以く協ふとゝ乃ず是ふ互ひふ仇敵の如く色ふ顯いし怒り爭いゝ之より夫婦ゝ親しくを疎く有り行離別のゝとゝ有り侍るくし恐き慎しむべきこと有らぶや

婦行章第四

婦行とゐふは、女乃行ひ乃り、夫き女ふ四の行ひ
乃り、一を婦德とゐひく女の德乃り智惠才能人
ふ優きな系とのゝ云ふふ乃ちば、心たゝ潔よく
正しゝく操を守り身乃行恥る心乃りて起居
動作禮法ふ違えぎ系と云乃り、二を婦言と云ひ
く女の言やり、利口辯舌尼りぬるとのゝいふふ
乃ら此言を撰び言ひくけの乃き事をいえば、い
ふべき時ふ乃ちりて云ふなこのりふく、辭多から
ぬ不問語せゝしてかしがきと人ふ厭いきさ

ゑやうゐをもつて云ふなり。三を婦容といひて、女の容貌なり。顔貌麗しきものゝいふにあらず。垢つき汚きを除き衣裳を早く洗ひ濯きを潔よくし、其時々に浴ミ沐ふ事を惰ずして、身乃不浄しからざるをいふなり。四を婦功といひて女のなすを志ゝなり。其爲の巧ミなる事人に優れたる技のミいふにあらず。心をいきて織縫ふをば怠らずにいとまきをひく徒らに遊ばず家の内乃をかたらひ怠らざるをいふなり。此四つは行ひは女乃大なる德義にして一として缺くべきを

なきが心技放なるをして常々勉め行ふべし。我心に善き道とおもひ之を動めなきんとおもはゞ行ひがたき事にあらず。善惡とも我心乃思ひいきより起り待る物にこそ。

專心章第五

專心といふは心技一筋にして他念なく夫に事ふるなり。聖人の定め置給ひし禮法なれば夫は二度娶る義なり。女は二度嫁ぐ法なし。夫は天にたとへ女子乃なきを妻の夫を戴く事天のときを覆ひ給ひ地のきばるが如く思ひて夫に

はゝ奉ゝ〜〜兩夫ふ見ゆる道ゆきちとハ戴く天の二つゆきゞ如く夫ふ放ち出ゆきたる女ハ天の覆ひ玄離きさゆゞ如くゆきば人間乃内ふ居らせ行ひ神明ふたゞひ奉きば天罰を蒙むり禮義過ちなきば夫之玄攻む誠ふ謹〜〜恐るべきとゆらぬやちきば夫の心を得さ隨ひ事まつきば偕老同穴の契り違さば夫の心玄失ひ爭ひ逆ひ侍きば〜〜〜夫婦乃中疎く成行ゆり夫の心をとり得んとて媚諂ひたる態をゆ〜〜虛空ゆる者ゝ〜〜を求むるハならば惟我ゞ

心を一筋ふ〜〜禮義玄正〜〜し起居坐卧ふつきて行義正〜〜耳ふ惡〜き事玄聞うば眼ふ邪ゆる物を見ず外へ出るとく分きく形ちつくゆるとゆゞ内ふ在とても身持を棄ず人を招き集め人多き事を好まば故無ふ門の外方を見歩行とゆゞき是等の類ひ玄心を一筋ふ〜〜禮義を正〜〜ずと云ふ起居動作輕卒〜〜〜〜物噪〜く見聞事正〜〜ゆら玄我家ふ〜〜〜ゆ形を棄髮玄を素〜〜身持ふかゆゞまば外ふ出るときい形作う身を飾りて〜〜ふゆ〜き事玄をよもとゆく

ひちらし見まゝき事をも見る類ひ是き皆心一筋ゆらぎ女乃禮義正しからぬ乃り能々鑑み念ひくだし物むべき事乃り、

唐價といふ名人直諫しく君乃怒を蒙り嶺南と云遠き山國ふ逐放き々多ゝ門出ふ臨み妻董氏ふ申はきゝるハ此度の事法乃爲ふ罪せらるゝふ非きバ歸り來つべき事覺束なく況しく生死乃程も測らきを然るふ汝い少年少ゝて幸ひ子たふ有らはきバ空しく獨住しく待ひ給へよゝ自行末計ひくよからず方もならい心置なく行ゆゝしく今ハ暇遣をゝといと懇ふ謂まれゝきを董氏泣々答る樣妾夫君ふ嫁るりへる夫君ふ不幸ハ妾乃不幸假令如何なる事乃りとも再ひ他家ふ嫁をつき心乃願くる妾をしく女ふ道を全うせしめ給へまゝとゝ麻繩を以く髮を束ね其結目ふ封をなし夫ふ請ひく手づから文字をしるしめ自ら誓く思へらく夫君首尾よく歸來給まゝバ幾歲經るとも此封を解ゝとく多年一日乃如く衣裳を改めを髮ふ膏ぬらん貞節

を貫きしが漸く廿年を經夫歸來ふるまいに初
て夫ふ請ひく彼時封せし結目を解き給ふ
初乃如く事へ侍りぬるとなり

曲從章第六

曲從といふは曲て從ふと云ふを也善き或善と
云ひ惡きを惡しと云ふは曲るといふ物ふなら
ば女い人ふあるべからざるを我が理を曲て
爭ひ逆らば夫ふ從ひ奉るべし夫い時ふ
て諫むる事ふ有ら共勇姑ふ聞ざる
僻事を給ふ共爭ひ諫むる道有らば例令ば

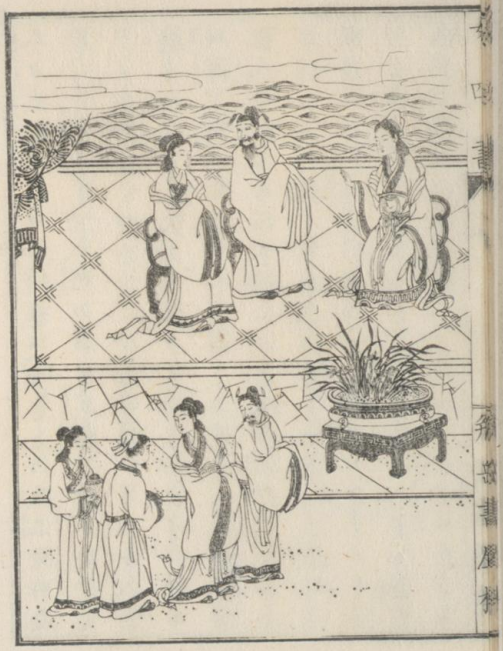
勇姑此事い惡しと曰給いば縱令ひ善事ふ
先らちおきを從ひ奉る若斯しを然るべしと
のるふをならい惡うらんを能く知りたり共
先づ其仰せふ任せ侍るべしはくあを曲て從ふ
といふ申侍る也勇姑乃老僻く曰ふとく善惡を爭
ひ逆ひ侍らばたとひ夫ふ能く事い侍るとも夫
婦の道遂ぐべからば古乃禮法ふも夫乃心ふ適
ひなる妻ふとも勇姑乃心ふ容らぬきを逐出し
夫の心ふ適いきき共勇姑乃心ふ協ひぬきい出
きぬ法乃りと記し置侍るなり

和叔妹章第七

和叔妹といふは妯娌姉妹と親しくまろあとり夫の心ふ入る事い男姑ろ我を愛し給ひく常々夫ふも能いひきかせ給ふもろ彼り男姑の我を愛し給ふる娌姉彼どのわがあとを譽さ能言ひ彼し給ふもろ彼り然らば此心をよく考へく彼ひよめこあうとめと親しくしを其心ふ協ひ侍るやうふまくし女の浅ろ彼ろ心ふくい我夫一人の心ふ容きいよきと思ひく斯の如き遠き慮り彼きもろふ傍らより惡しく言立憎うを

毛戎吹疵を求むるが如くなるべし一旦い夫の心
ふかかひ侍る共遂ふい夫ゝ其惡名を聞くうと
こ侍るべし昔孔子の御弟子顏子とて聖人ふ近
き人だふゝ過いなきふならば能過ち改め
二だひせちゑ事賢なりとて孔子ゝ譽給ひ々き
ば過ちい誰ゝ有べきとなきば況しく女い才智
優きなりとも如どゝ過ちなふ可きやゝ人の
妻どなりて其家乃人々と悉く親しくなきば仮
令ひ少しの過ち有とゝふ言ならば人とて〻かつり
さよちゑふのくいひなし侍るめの也若家内乃

人々と親しからば侍きゝよきとい取上いふ人
なくて惡しきとい聊の事ゝ尾鰭を付くいひた
つるとゝ如なきをいつとなく男姑の耳へゝ入く
惡しく思えき夫ふゝ疎ませ侍る物なきば能々
此理を辨へ家内の人ゝ親しく侍るべし如きば
聖人の詞ふゝ心を同ふせゑ人の相共ふとゝい
ひなつるへ香しき事蘭の如しと云つり誠ふ一
家乃人々相和き心を同らし侍らば如どゝ乃
いひちこの如く侍るべき人の妻たゑ人とて謙り
從ひて姑娌姨妹ふ親しく侍へなひよめあるう



とめも義理を思ひて好身を厚くしたまひ
事のゝ言ひたゝ侍らば自ら男姑之を愛〜憐
み給ひ夫の心ふもめかひ侍らゝ固より謙る
い徳乃本從い女乃行ひまゝ常に習ふ〜を此徳
行を謹み守り侍るべし古語みかゝ〜あふたりく
る惡まゞ。あゝふたりくる厭ふをいへるとい
女乃へりくるり從つる徳をひ侍るべからら
しゝ

晉の國ふ王祥と王覽と云へる異母乃兄弟ハ
ふ王祥い先妻ハ子ふ〜て、王覽い繼母乃子な

り、繼母朱氏我子のごゝ戎愛し、繼子王祥を憎む
と一方ならず、常ふ方々しき事のゝ多くして、或る冬の頃氷いとつようもりほめ者多ふ
川ふ出て、鯉をとり來きあるゝ類多のゝ者
まゝ、弟王覽頻ふうゝくふ思ひ、此のふ義しく
母の心を和げ、兄の被虐を宥めんと、種々心戎
をき、母の兄ふ仰せ給ふ事たまゝ、何事ふまれ
己れ共ふ物〳〵ゝ多と思ん、まゝ繼母王祥の妻
戎憎く非道ゝ振舞多者れい、王覽ゝ妻も亦嫂
の艱難を見るふ忍ぶ、己を代りく其辛苦を取

り、憂目戎共ふ〳〵夫婦心戎同うしく、兄姉を
たゝ人常ふ其苦勞戎助者兄弟姉妹いと睦ま
しのり者れも、繼母と遂ふ我身ゝ僻事ふ
戎悟りて、後々ハ繼子生の子ゝ隔く思く愛し
憫く、一家美事ふ治まり齊ひしとやゝ。

女誡終